

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月13日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13008

研究課題名（和文）経済思想における社会的価値：19世紀イギリスを中心に

研究課題名（英文）Social value in history of economic thought: mainly in Britain in the 19th century

研究代表者

柳澤 哲哉（YANAGISAWA, Tetsuya）

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：90239806

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：経済学は物的豊かさや、経済成長、経済的効率性を追求する学問であると見なされがちである。しかし、19世紀イギリスの古典派経済学者の多くは金銭的に測られる経済的価値だけではなく、余暇や生活の安定などの社会的価値にも関心を向けていたことを本研究は明らかにした。例えばマルサスは家族の形成が理想的に行われるようになれば、低成長社会において労働が軽減され知的な活動が促進されると考えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は経済学確立期の問題関心に社会的価値という光を当てることで、経済学が追求しようとした課題を明らかにするものである。こうした作業を通じて、今日、経済学の限界として指摘される、経済成長至上主義や公共性の欠落といった問題の解明と、さらに社会的価値を復権させる可能性への手掛かりを与えるものと期待される。

研究成果の概要（英文）：Economics is regarded as a study mainly focusing on material richness, economic growth or economic efficiency. This research revealed that most of the British classical political economists were concerned not only with economic value measured by money but also with social values such as leisure time and life stability. For example, according to Malthus, with ideal family formation low-growth economy could reduce labor and promote intellectual activity.

研究分野：経済思想

キーワード：社会的価値 功利主義 低成長 家族 救貧法 マルサス シーニア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

経済学の主要な関心は経済成長や経済的効率性であると見なされてきた。19世紀前半のイギリス経済学を扱う場合も、もっぱら経済成長や実質賃金率の上昇という観点から考察されてきた。しかし、経済学が確立していく時期の経済学者たちは、価格に集約される経済的価値だけでなく、そこには集約しきれない諸価値を前提として、あるべき社会や政策を考察してきた。例えば、当時の経済学者は必ずしも経済成長だけを政策目標としてきたわけではない。J.S.ミルが停止状態を肯定的に捉えていたことは知られているが、それ以前にジェームズ・ミルやマルサスも労働が軽減された低成長社会の可能性を視野に入れていた。また、救貧法改正をめぐる経済学者の見解は単純な救貧法廃止論ではなく救貧法改正論に収斂していくのだが、そこには自立的な家族の形成や労働者間の共助システムの構築という課題が存在していた。彼らは物的豊かさとは別の社会的価値の存在を前提としており、それを解明することは経済学の可能性を再考するのに有益であろう。

### 2. 研究の目的

古典派経済学者の多くは功利主義を共有していたが、従来のアプローチでは実質賃金率（もしくは総額）という物的な側面から社会的功利を考察することが多かった。しかし、政策提言やあるべき社会像を分析することで確認できるが、彼らが追求した目標の中には共助のあり方や家族の自立、生活の安定、労働の軽減、余暇の増大なども含まれていた。これらの社会的価値はこれまで等閑視されがちであった。本研究の目的は、狭義の経済的価値とは異なる、経済学の確立期における社会的価値を解明することである。本研究は、経済学の限界として指摘される、経済成長至上主義や公共性の欠落といった問題を解明し、社会的価値の復権に手掛かりを与えるものと期待される。

### 3. 研究の方法

19世紀前半の経済学者の著作の中から、停止状態論、家族論、救貧法論における社会的価値の議論を分析した。主要な対象はマルサス、ジェームズ・ミル、シーニア、サドラー、チャーマーズの著作である。また、補足的な分析としてマルサスにおける功利と徳との関係も考察した。

### 4. 研究成果

#### (1) 停止状態論もしくは低成長論における社会的価値

古典派経済学者たちは、アダム・スミスのように競争の作用によるのか、リカードウのように収穫逨減の作用によるのかは別として、経済成長につれて利潤率は傾向的に低下せざるをえず、やがて停止状態に必然的に陥るだろうと予測していた。停止状態を肯定的に評価し、そこに精神的文化や道徳的進歩というアソシエーションの可能性を見出していたJ.S.ミルは、経済成長の終焉を悲観的に見ない例外的な存在と扱われてきた。利潤率の低下を回避するために自由貿易を擁護するなど、古典派経済学者の多くが成長志向であったことは間違いない。しかし、リカードウ自身も停止状態に近づく時期を「最も活力のある状態」と表現していることから分かるように、J.S.ミル以外の論者も停止状態を必ずしも悲観的に見ていたわけではない。

人口の悲観論者として語られることの多いマルサスでさえも、定常的ないしは逨減的な労働需要に人口を抑制する習慣が普及すれば、生産力の上昇によって労働時間は短縮し、過酷な労働が減少することで、下層階級の中流階級化が進行すると想定していた。「勤勉と徳の報酬は数量的に増加し、人間社会の富くじは、空くじが減って、賞金が多くなるように思われる。そして社会の幸福の総計は明らかに増大するであろう」(『人口論』後続版)と停止状態を功利が増大する状態と楽観的に見ていたのである。

ジェームズ・ミルもまた、人口増加を抑制できるならば、停止状態において労働者が十分な報酬を得るだけでなく、純生産物の大部分は「幸福の享受という点でも、最高の知性や道徳の達成という点でも最も好都合な環境に置かれている多数の階層の手にわたっていく」と想定していた(『経済学綱要』)。

古典派経済学者ではないが、生物学的人口法則で知られるマイケル・サドラーは、実質賃金率の上昇により人口増加が生物学的に自然に停止すると想定していた。「人類が狩猟から牧畜へと、さらに現在の農業段階へ、そして究極的には最高の文明状態に到るにつれて、労働は分割されるようになり、たえず労働時間と強度は低下し、そして多くの人間はより知的な探求に没頭できるように骨折り仕事から解放されるか、骨折り仕事とは全く無縁となる。同時に、生存手段は累進的に増大し、安楽と奢侈がより一般的に普及する。あらゆる段階ごとに増加原理は縮小していき、人類の最大多数にとって到達可能な最高度の幸福をもたらすちょうどその時に増加原理は停止するであろう」(『アイルランド』)と述べている。

このようにJ.S.ミル以前から、幸福を最大化させる可能性を停止状態に見出す論者が存在した。多くの論者に共通しているのは、人口抑制のもとで実現する停止状態は、労働が軽減し、知的な活動や道徳的向上を享受できる社会である。停止状態論を通じて、物的な豊かさの追求とは異なるところに、社会的な幸福を認めていたことが確認できるのである。

#### (2) 家族論・救貧法論における社会的価値

マルサス、シーニアを中心に社会の基本単位である家族の観点から社会的価値の考察を検討した。マルサスは家族を個人と社会を媒介する位置に置き、社会的功利を増大させるうえで近代家族の果たす役割を重視した。家族の役割は、第一に予防的妨げを作動させて人口を調節する役割を担う。それは望ましい低成長社会を実現する上での必要条件である。労働者階級は物的な豊かさだけを楽しむものではなく、家族の形成や子供の養育自体も幸福の源泉にするはずであるし、家族の形成と自らの生活水準の低下や労働の増大とを比較考量する主体であるとマルサスは想定した。家族は情念を発展させることで、生活の安定なども幸福の源泉にしている。いわば家族は幸福の源泉を拡大させる機能を果たすことになる。家族の第二の役割は個人と社会を媒介するところであり、子供の嗜好や性格形成、道徳的改善だけでなく、子供に教育を授ける役割まで担うであろうと想定されている。マルサス主義的結婚システムが機能するならば、家族責任を果たす近代家族が形成されるという好循環が生まれるとマルサスは考えていた。したがって、19世紀に広まる中産階級的な家族像を先駆的に提示した論者と評価することができる。

このように望ましい家族を形成するためには、労働者階級の家族が潜在的にさらされている「核家族の危機」から家族を保護する必要があるとマルサスも考えていた。そのために、救貧給付の全廃論者と誤解されることが多いが、実は多子家族や病気や高齢による労働不可能者への手当を支持していたのである(柳澤 2019)。

シーニアは、『人口講義』(1829)等で浪費を好む怠惰な労働者像を想定しており、家族の果たす役割を軽視していたが、『救貧法報告』(1834)においては「どの社会階層にとっても幸福と徳の偉大なる源泉は家庭内の愛情である。このことは労働者階級のような資源がほとんどない人にはとりわけよく当てはまる」と立場を変更しており、結婚の意思決定にあたって女性の役割も視野に入れるようになる。家族の役割について、おおよそはマルサスの系譜に属する論者と整理できる(柳澤 2018)。

### (3)マルサスにおける幸福と徳

マルサスは幸福だけでなく徳についても肯定的に語っており、個別的な徳として慎慮と貞節をあげている。しかし、徳を身につけること自体を価値あるものとする徳倫理ではなく、徳を「人間の幸福の最大量を引き出すこと」と定義していることから分かるように、徳がもたらす帰結としての幸福によって徳を基礎づけている。したがって、徳の捉え方は功利主義と整合的である。ただし、「知的快樂は肉体的快樂よりも上位である」というゴドウィンの考え方を受け入れており、快樂主義的な幸福観をとっていない。情念の発展によって幸福の対象が拡大し、経済的価値の範疇に収まらない「知的快樂」や「夕べの快適な一家団らん」まで幸福の要素に含まれていくと考えていた。したがって、幸福の包括性という点でベイリーとは異なる(柳澤 2016, 柳澤 2017)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

柳澤哲哉 2017, 「書評: Sergio Cremaschi, Utilitarianism and Malthus' s Virtue Ethics: Respectable, Virtuous and Happy」『マルサス学会年報』 26号.p.119-123, 査読無し.

〔学会発表〕(計 2件)

柳澤哲哉 2018, 「マルサスとシーニアにおける家族と救貧法論」知的源泉としてのマルサス人口論研究会.

柳澤哲哉 2015, 「マルサスの功利主義」イギリス哲学会関東部会.

〔図書〕(計 2件)

柳澤哲哉 2019, 「マルサスにおける家族と救貧法」柳田芳伸・姫野順一編『知的源泉としてのマルサス人口論』昭和堂, p.40-64.

柳澤哲哉 2016, 「マルサスの功利主義」仙台経済学研究会編『経済学の座標軸』社会評論社, p.139-153.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。